

ホトトギス

一月号



ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別扱承認誌第六二七号
明治三十二年十月十日第三種郵便物認可(毎月一回一日発行)
平成十六年一月一日発行(第百七卷第一号)

平成十五年一月三日 朝日新春詠

処女句集形見となりし年惜む
考への行つたり来たり絵双六
二つ目はロビーに噓こぼしけり
一月四日 芦屋ホトギス会

東雲を抜けて初日となりゆける
春着着て嬉し脱ぎても又嬉し
寝正月出来ざる性と思ひけり
一月五日 関西野分会

日溜の葉裏に蝶の凍ててをり
笑初何かいたづらしさうな目
凍蝶の命あるごと風過ぐる
鯨鱈なきや雪深き地を発たれ来て
たちまちに声集まりぬ初笑
一月五日 下萌句会

初夢に又も昔の我の居て
風花や芦屋は山の近き町
新年の言葉飾るも二た三言
青空の消えて生れて風花す
新年といふ華やぎを通りけり
一月六日 ロイヤル俳壇

閉ざされし荘初富士に抱かれて
寒卵割りていつもの如くあり
見てをりし雨が蔽となる光
買初の心も少しロビー抜け
朝より小寒の日の外出かな
一月九日 清交社

新年と思ふ心に明けにけり
結局はいつもの如く三ヶ日
初髪を結つて誰にも会はぬ日
宝恵籠を少し身近なものとして
初旅にして上京のはじまりして

吉兆を飾る浪花の会となる
三ヶ日とてたゞ過ぎて行くばかり
手ずれなき飾り手毬にある月日
お年玉用意の追加ありにけり
何もせぬやうで厨の三ヶ日
一月十日 工業倶楽部

初富士の見ええねば心切りかへて
枯木立にも命の芽色に出し
堂ヶ島とや初旅の一駒に
エメラルドグリーンの渚春隣
寒林に日の当る峰乗つてをり
一月十二日 偲ぶ会 第二回

火色なほ朝日をこぼむどんか
どんと燃え尽きさうに人去り難く
一月十四日 大阪倶楽部
ほどく荷の水仙の香と分る迄
寒の雨上りゆく雲割れて来し
潮の香を海に返しぬ野水仙

松の内とて仕上げねばならぬ稿
旅終へてなほ松の内なりしかな
香をほどき初むは夜明の野水仙
一月十四日 綿業倶楽部
三寒の予報は今夜からといふ
このままで続きさうにも四温かな

探梅の心に狭庭巡りにけり
三寒をいざなふ雨となりけり
一月十五日 夏潮句会
枯萩を焚けば火色の変わりけり
わが庭にどんどの続きありにけり
まどひ来し焚火の匂ひ消えぬ席

火搔棒持つ手を替へて焚火守る

兼題の咳が座つてをりにけり
風花や年に一度の母校訪ふ
一月十六日 赤穂義士 三百年
今の世に語り継がれし雪の朝
一月二十一日 有恒倶楽部

悴みて若き命を惜しみけり
悴みても添へありしこと寒見舞
乾杯や悴みし指高く上げ
寒見舞つながらゆける緑かな
五日ほど日本離るる春隣
さつきまで悴んでみし庭を見る

旅立の心のどこか悴める
寒菊を剪れば色なき庭となる
悴みし記憶は消えず地震の街
一月二十一日 無名会
初空を飛びて仕事の待つ街へ
子等通りたるは明らか氷柱折れ

こぼすものありしと仰ぐ初御空
崖氷柱瘦せて下校の時間かな
軒氷柱一日人の出入りなく
一月二十四日 時雨会
室咲の花を戻して客間閉づ
待春の心忘るる旅路とも

客あれば客間に運ぶ室の花
計画のまだ大雑把春を待つ
水仙の香を囲む距離ありにけり
一月二十五日 野分会
初笑され初泣となりしこと
はるばると雪の消息携へて

一月二十七日 フイリピンへ
身軽にて避寒の国へ旅立たん
ブルネイの王のお通り春隣
一月二十八日 アキノさん表敬訪問
再会を果たし得し旅春近し
一月の百合を捧げて祈りけり

整 体

稲畑 汀子

一年近く腰痛に悩まされた過去が嘘のように今はもう何ともない日々を送っている。再びあのような思いをしないですむように私は毎日入浴の時の五分間の正座は欠かさない。月に一度、美奇さんに紹介して頂いた整体の治療を受けて来た。東京に滞在している間のほんの五分か十分、効いたのか効かないのか分からないような治療であるが、これもずっと続けている。

「私が治すのではなく、私はご自身が治す手助けをするわけで、お彼岸が丁度体の変わり目になるので変化が現れるのが楽しみなのです」

整体師の藤山さんが言われることを理解しているわけではないが、藤山さん自身も腰痛を経験したと言う。

東北、東海、北海道、北信越とこの二カ月の間にホトトギス大会への旅が続いた。私の腰痛は治ったのであるが、気をつけなければならぬと荷物は余り持たないようにして来た。

腰痛の原因となった足の捻挫も再びするわけにはいかない。

腰の筋肉が回復して痛まないにしても背骨の四番目と五番目の

歪みは歳のせいでは治らないことはMRIが証明していた。

加賀の山代温泉「ホテル百万石」で開催された北信越ホトトギス俳句大会に私は車を運転して行くことになった。道路はよく空いていて案外早く目的地につくことが出来た。車はホテルの正面の駐車場に駐車したままにして、私は皆とバスで吟行に参加することにした。

大会の朝の吟行バス出発は八時、私は早々と荷物の整理をして吟行に必要なものを車に積み込むことにした。先ず歩き易い靴に履き替えた。車に乗せて来た古い緑色の少し褪せた鍔広の帽子を被ることにした。句帳をいれたハンドバッグ一つを持ってバスに向かった。

「先生、お帽子素敵」

「いいえ、随分昔のを出してきてすっかり褪せてしまったのよ。昔はリボンと同じ鮮やかな色だったのよ。今はグレイになってしまつて」

「はじめからその色かと思いましたが。その色も素敵ですよ」

「有難うございます」

その時、私の足許がぐらつと揺らぎあつと言う間に前につんのめつた。

「あ！」

「あー」

ロビー正面を出て暫く歩いた辺りの少しの段差に気がつかない

で躓き踏み外して転んでしまったらしい。しまった！と思うのと同時に帰路の運転のことが頭を過った。

「先生、大丈夫ですか？」

「大丈夫よ」

急いで立ち上がると大したことはなさそうである。左の膝と左の肘に擦り傷のような痛みが走った。骨には異常がなさそうなのでほっとした。

「大丈夫。ご心配お掛けしました。さあ、バスに乗らなければ」

転んだりしてみつともないなあ、と眩きながらバスに乗り込んだ。座席に座るとさっそく気になる膝を覗いた。擦り傷が二箇所出来て血が滲んでいる。ズボンは何ともないのにと思つて肘を見ると薄い上着の袖が少し破れて血が滲んでいた。

今月の全体の約束の日が近づいた。治療をして頂く日はまだ少し傷の痛みが残っていた。

「転ばれたのですか？ お彼岸の前後にはよくそのようなことがあります。体が変わったりするのですよ」

整体師である藤山さんはそう言いながら、床に伏せるように横たわった私の背骨を押して行き、

「あ！ 四番目と五番目の骨がかちつと嵌まっていますよ」

「へえー そんなことがあるのでしょうか」

「もしかしたら、転んだからかも知れませんよ」

という。

「転んだ時にふと背筋がしゃんとしたような気持になったことを私は思い出していた。」

「転んだ後、何となく体に身が入ったようなだるい凝りが二三日あつたが、それもいつか消えていてすっかり体調が元に戻っているのに気がついていました。」

廣太郎句帳

廣太郎

下田節前列で見えて悴める 十五日粥に目覚の早かりし

ひたひたと波寄せて春寄せる海 若き娘の視線氷を突き抜けて

春を待つ来年を待つ年寿会 悴みて川向く目線皆寡黙

NAVYの墓碑銘寒く故国向き 松過の蕉心会に和む顔

一月の年尾偲ばれ寿がれ 一月二十一日 草木瓜会

風下に来て臘梅と気付くまで 初御空日出づる国に生れし幸

ラグビーのボールは意思を持つごとく 初空や地震八年は遠からじ

轍より凍蝶ほろと飛び出せり 籠に盛る春七草に風生るる

凍蝶の此岸彼岸を分つ風 生駒より初東雲の六甲へ

スクラムの解けてラグビーボール舞ふ 初御空天与に白きもの降らせ

湯気上るラグー背中のストライプ 一月二十八日 若水会 於虚子記念文学館

風花に三代句碑の騒きかな

風花に三代句碑の騒きかな

俳磚に風花及ぶ一とところ

風花や開館の日を引き寄せて

森下に通ひ続けて冬木立 俳磚の庭を冬芽の彩れり

平成十五年一月八〇日 一水会

福寿草昭和の香り残る館

ニューイヤークンサート聴き初風呂へ

松の内升さんの喬迎へたる

一月九日 土筆会

初風や犬と戯れ歩す渚

寒見舞出会があれば別れあり

一月十一、十二日 年尾偲ぶ会

船音の笹子に和してをりにけり

凍結の表示一瞥して山路

一月十二、十三日 年寿会

点呼する返事の声も春隣

冬ぬくし海豚は海を恋うてをり

一月十六日 蕉心会

厳寒や大川何も語らざる 俳磚に風花及ぶ一とところ

大川の威に厳寒の風緩む 風花や開館の日を引き寄せて

森下に通ひ続けて冬木立 俳磚の庭を冬芽の彩れり

雑詠 汀子選

雲脱したる月のごと脱稿す 東村山 村松紅花
 稿急ぐごとと月雲の中急ぐ 同
 草の戸や月と火星と美しく 同
 寄書といふ声援の爽やかに 神戸 山田弘子
 きのみより今日の火星に涼新た 同
 新秋の俄に近き一忌日 同
 太陽が見せてくれたる霧の奥 東京 今井千鶴子
 山莊を出て霧の音森の声 同
 五十年昔のわれ等山の秋 同
 星涼し神にも逢瀬あることを 石川 辻口静夫
 海へ出る空に秋燕まだ馴れず 同
 藪蘭の紫もまた神さびて 同
 曙光に覚めつつありぬ白牡丹 福山 竹下陶子
 日本のピカソ描かざる白牡丹 同
 よき話せんとて新茶淹れにけり 同
 沛然と降る降りやうも初嵐 榎原 稲岡 長
 夜霧てふ巨大な闇に捉はるる 同
 朝霧やただ乳色の虚空あり 同

富士と闇分つと思ふ秋の夜 神戸 長山あや
 富士の闇ほどかむと啼く時鳥 同
 夕ごころ誘ひ初月消えにけり 同
 噴水のワルトトレモロスケルツォ 東京 稲畑廣太郎
 浜木綿の香の軍港でありしかな 同
 分骨を所望せし虚子塔涼し 同
 青眼の閻魔六波羅蜜寺かな 京都 粟津松彩子
 雲をやり過ごし一と息入れし月 同
 掃苔の闕伽は水より濃かりけり 同
 前梅雨や籠居常のことながら 福岡 松尾緑富
 走り梅雨気候の変化身に添はず 同
 夏風邪か気になる咳をこぼしつゝ 同
 山中湖しづかな秋となつてみし 熱海 嶋田一步
 霧のバス見えざる富士をみんな見る 同
 虚子ともに見たる銀河と来しが雨 同
 秋の蟬骸となりて重くなり 東京 坊城俊樹
 法師蟬墓に寝転ぶ漢みて 同
 秋蟬に雲の匂ひの降りて来し 同
 つやつやと乗りにくさうな茄子の馬 神戸 三村純也
 会ふまじき人と会ひたる墓参 同
 大淀の大芦原の初嵐 同
 青ぶだう言葉はいつも貧しくて 熊本 岩岡中正
 梅雨の蝶水より生まれたるわれら 同
 夏炉焚き星となりたる人のこと 同

雑詠句評(十一月号より)

子等が来て蟻が来て甘いものがある 東京 稲畑廣太郎

三瓶野の俄かに暗みほとぎす 姫路 桑田青虎

俄かに辺りが暗みかけたなと思った時に、ほととぎすの声が聞こえた。一瞬の静寂と、それに覆いかぶさるように、ほととぎすの一声。時と場所を錯覚しそうな一瞬があったように思える。なだらかな起伏の三瓶野に沿って、ほととぎすの鳴いた方向を確認するかのように見回す作者が、三瓶野の自然に溶け込んでいる。自然体でいながら天地の変化を見逃さず、静かに取り入れた一句の仕上りが、感動をより深いものとして訴えている。(雅)

自然の豊かな三瓶山の高原のたたずまいは何度訪ねても新しい発見があり心惹かれる地である。三瓶山の裾を引く草原は四季折折の風情を楽しむことが出来る。雲が低く込めてきて辺りが暗くなるほととぎすが鳴き渡った。その不意の変化に作者は心囚われていくのである。(汀子)

「子等が来て」「蟻が来て」「甘いものがある」という五・五・八という三つのフレーズからなる、口語調俳句。時間差攻撃のような一句の組み立ての面白さに瞠目する。「甘いもの」つまりおやつに集まってきた子供達の表情がまず見えてくる。ところが甘いものに惹かれてやってきたのは子供だけではない。「甘いもの」をいち早く察知した蟻がやってきたのだ。こう詠まれてみると、仲間を誘って甘いものに集まってくる蟻の姿が活写されているではないか。

常に何かを試みようとする姿勢、大いに学ぶところありと、心より賛同を送る私である。(弘子)

子供たちが来ておやつに甘いお菓子を食べた。「こぼさないで召し上がれ」といっても足元にはお菓子の屑が散乱してしまふ。それを素早く見つけた蟻が来て甘いものにたかりそれを曳いて行く。という展開であるが敲き込むように甘いものへ寄る雰囲気述べたのが面白い。(汀子)

(以下略)

若水集

廣太郎選

二百十日・撫子

初恋の撫子ほどの記憶かな 岡山 富阪宏己
 撫子の高さを視野に児の世界 同
 日も風も撫子に来て澄みにけり 同
 森林を二百十日が掻き鳴らす 大阪 蔦三郎
 撫子の花のちりちりちりと咲く 同
 撫子を以て点在の彩となす 同
 髪をとく二百十日の風の櫛 西宮 荒川裕紀
 文化祭二百十日と睨めつこ 同
 撫子の多く語らぬ主張かな 同
 撫子に溺れたる児の手が上がり 旭川 大塚信太
 家飛ぶも借りは飛ばざる厄日かな 同
 撫子といふ一草に野がしまり 同
 湖きさら二百十日を忘れしか 東京 石川星水女
 雲一つ二百十日を動かさざる 同
 撫子のピンクに少女期を語る 同
 引寄せて引寄せて撫子の仔細 熊本 内藤悦子
 撫子の一弁ごとの細工かな 同
 撫子の己がやさしさ故揺るる 同

撫子に屈めば見ゆる世界あり 福岡 眞木礼子
 撫子の雨意より早く濡れ色に 同
 耶蘇島の撫子風に埋れつつ 同
 すぐ萎えし男の摘みし撫子は 大阪 林直入
 撫子や女性の強くなりたる世 同
 情秘めし薄紅川原撫子は 同
 美杉みち沿ひに撫子咲く川原 尾張旭 西村早史
 沢道の尽き撫子が咲くところ 同
 頼りなき茎に撫子風情あり 同
 撫子のやさしき丘となりけり 大阪 塙告冬
 高原の駅撫子に降りたちぬ 同
 撫子に絵心の揺れはじめたる 同
 雨雲の富士へ集まる厄日かな 小金井 武井良平
 撫子や川原をわたる風白し 同
 撫子やホスピス前に小さき花舗 同
 厄日より火星の話もちきりに 西宮 田中祥子
 肅々と虚子学びぬる厄日かな 同
 雲間より青空のぞく厄日かな 同
 探しゆくボールの先に撫子が 高槻 新道廣
 厄日過ぐ匱に夕日残る湖 同
 忘れぬし厄日の話するも旅 同
 木道の尽き撫子に引き返す 岡崎 小森葵城
 萎え残る撫子一花二花三花 同
 撫子の瀬音に傾ぐ築地塀 同

若水集句評 廣太郎

撫子の高さを視野に児の世界 岡山 富阪宏己

高さ三十センチほどの茎の高さを持つ「撫子」である。それが丁度子供の視線の高さとマッチしている、という意味であろう。花を咲かせている場所で子供たちの遊んでいる姿を想像するにつけ、季節との対比が誠に可憐に伝わってくる。

文化祭二百十日と睨めっこ 西宮 荒川裕紀

運動会もそうであるが、「文化祭」も秋の風物詩であろう。スケジュールがどうしても「二百十日」前後になってしまった。文化祭の場合は雨天中止はないだろうが、それでも晴天に超した事はない。まして台風は論外であろう。「睨めっこ」という言葉がその心情を余すところなく伝えている。

撫子の一弁ごとの細工かな 熊本 内藤悦子

まるで切り紙細工のように切れ込みの入った花弁が特徴的である「撫子」。自然の成せる業であるが、何か大いなる「意思」の

ようなものが働いているような感慨を持った作者なのであろう。こんな小さな花をも、自然は確かに意思を持って咲かせているのではないだろうか。

厄日より火星の話もちきりに 西宮 田中祥子

何といつても平成十五年の話題は阪神タイガース、いやそれもあるが、六万年振りに地球に大接近する「火星」であろう。厳密には八月二十七日が最接近の日であったが、丁度「厄日」も近づいており、またその後も話題が絶えない。さらつと世相を述べた事により季節がすつきりと描かれている。

探しゆくボールの先に撫子が 高槻 新道 廣

一見して草野球を筆者は想像する。あまり整備されていない河川敷にあるグラウンドか。外野の頭を越えて転々と転がって行くボールは何時しか雑草に紛れ、見付かった先には奇麗な「撫子」が咲いている。花に見惚れているうちに打ったバッターはランニングホームランである。そんな事を想像させられる楽しい句。

(以下略)